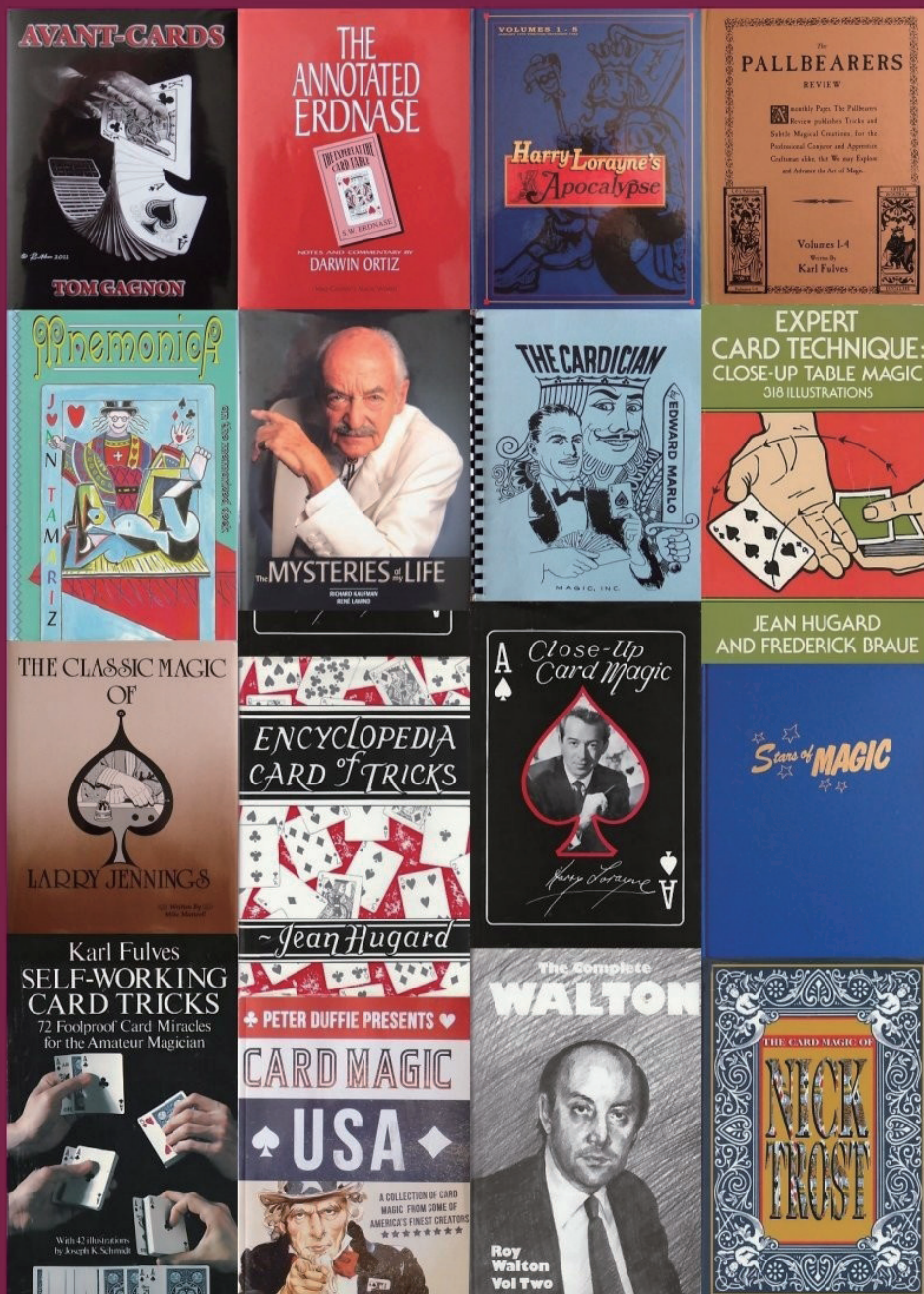


# Card Magic Magazine



No.11

March 3, 2013

by Hideo Kato



# カードマジック徹底研究

## プリンセスカードトリック

### ‘プリンセスカードトリック’の魅力

‘プリンセスカードトリック’の現象は、“Art of Magic”に(1909年)解説されている第一法に対する現象説明が、的を得ていると思います。翻訳しておきます。

マジシャンは4枚のカードをファンに広げて見せ、客にその中の1枚を心の中で選ばせます。マジシャンは4枚のうちの1枚を抜いて、ポケットに入れます。残りの3枚をもういちど広げると、そこには客が心の中で選んだカードがありません。客の思ったカードを他の客にも告げさせてから、マジシャンはそのカードをポケットから取り出して見せます。

‘プリンセスカードトリック’の考案者ヘンリー・ハーディンは、同トリックを1903年に単独に発売しました。雑誌“マハトマ”1903年12月号に、そのときの広告が出ています。その後“Art of Magic”に再録されてから有名になったので、同書が最初に発表された原典であると書いている著者もいます。

雑誌“スタニオンマジック”1905年7月号に、エリス・スタニオンが、‘Princess Card Trick (with my own additions)’と題して書いています。スタニオン自身は‘プリンセスカードトリック’のバリエーションだと述べていますが、客のカードがポケットから消えて、ポケットから出てくるという現象は似ていますが、手法としてはプリンセスカードのバージョンとは言えません。

スタニオンの第一法では、クラブの8、クラブの9、クラブの10、ダイヤのAを見せると、十中八九ダイヤのAが思われる、とスタニオンは述べています。ダイヤのAにワックスをつけておき、それを他のカードの背にくっつけることによって、クラブのAを消すというのです。そしてデュプリケートのクラブのAをポケットから取り出します。私には、十中八九、ダイヤのAが思われるとは、とうてい信じられません。

第二法では、4枚の中から心で思わせるのではなく、1枚抜かせて選ばせます。そしてそのカードをツバを使って他のカードの背にくっつけ、消失させます。そしてポケットに入れておいた4枚のデュプリケートカードから選ばれたのと同じカードを取り出します。

どちらも‘プリンセスカードトリック’のバリエーションとは言い難いものです。スタニオンには悪いかもかもしれませんが、それらのやり方は‘プリンセスカードトリック’のまがい物と言わざるを得ません。

しかしながら、スタニオンが'プリンセスカードトリック'のまがい物を書いてくれたおかげで、'プリンセスカードトリック'の魅力を明確に把握することができます。すなわち、客が心の中で自由に思ったカードが、1枚抜いたあとの残りのカードの中になく、しかも思ったカードをたずねることなしにそれが起こること、これこそがプリンセスカードトリックの魅力なのです。

そう考えてみると最近のインターネットで演じられている、思われたカードが消えるだけのバージョンが、プリンセスカードトリックのエッセンスを突き詰めたものということになります。しかしながらそのコンセプトは、とっくの昔にナート・ライブチヒによって生み出されていました。彼は4枚のカードを観客全員に見せて心の中で1枚を思わせ、1枚抜いたあと、残りの3枚を見せます。

まさにインターネットでやっているのと同じです。インターネットのように、たんに表示させるカードを変えるのではなく、すり替えなしに手に持っているカードを広げると、思ったカードが消えているのですから、観客の驚きは絶大なものであったに違いありません。

ライブチヒのやり方のように、客が思ったカードが消えただけで、それを再現させなくても成立するからといって、ケン・クレンツェルが"Card Classics of Ken Krenzel"(1978年)に書いている、ライブチヒのやり方をノーマルカードでできるようにしたというバージョンは、優れているとは思えません。

クレンツェルは表向きにビドルグリップに持ったデッキから、左手に5枚のカードを取っていき、そのうちの1枚を客に思わせます。5枚取った時点で、すでに客に見せたうちの4枚は他のカード4枚とすり替えられています。5枚の中から客に見せた1枚をどけて、残っている4枚を見せます。

クレンツェルとしては、ライブチヒがギャフカードを使って得た効果を、ノーマルカードで演じるのに成功した、と考えたかもしれませんが、「ライブチヒバージョンが成立している条件を忘れてはいませんか」と私は言いたくなります。ライブチヒのやり方では、見せたカードが絶対にすり替えられなかったことが、明確に観客にわかります。ビドルムーブでカードをすり替えるのでは、不思議さのクオリティが違います。

インターネットバージョンが世を席卷したことから、私たちはプリンセスカードトリックの魅力が何であるかを、はっきりと理解できたのではないかと思います。

もちろんそれは、消えたあとにポケットから現すことが間違いだということではありません。それはメインの現象に対するフォローアップの現象です。それはポケットから出てくることを強調するものではなく、メインの現象として起きた、4枚の中からはたしかに思ったカードが抜かれたということを補強するものであるのです。

## プリンセスカードトリック 第1法

= ヘンリー・ハーディン、“Art of Magic”、1909年 =

以下の文章は、原著からの翻訳です。

このトリックは、アメリカのマジシャン、ヘンリー・ハーディンが考案したものです。ハーディンは現代マジックの発展に対して、様々な素晴らしい発明で貢献してきました。

### \* 現象 \*

マジシャンは4枚のカードをファンに広げて見せ、客にそのうちの1枚を思わせませす。マジシャンは1枚のカードを抜いてポケットに入れます。もういちどカードを広げると、そこに客の思ったカードはありません。マジシャンは客のカードをポケットから取り出します。

### \* 準備 \*

最初に見せる4枚のカードはつぎの順にセットします。クラブのK、ハートのJ、スペードのJ、ダイヤのQ。マークの順は、有名なCHaSeDの順になっています。クラブのKの上につぎの3枚をのせます。クラブのQ、スペードのK、ダイヤのJ。これらをデッキのトップに置きます。

### \* 方法 \*

トップにセットしたカードをくずさないようにデッキをシャフルします。トップの7枚を取りますが、何枚取ったかわからないような取り方をします。残りのカードをわきに置きます。

7枚の表を自分に向けてファンに広げますが、エクストラの3枚はクラブのKの陰に重ねて隠したまま、クラブのK、ハートのJ、スペードのJ、ダイヤのQが見えるように広げます。左端の重なっている4枚は左人さし指で、左親指のつけ根に向かってしっかり押しつけ、重なっているのが保たれるようにします。

観客に対して後向きになり、ファンを頭の上に上げて4枚の表を見せ、1人の客にそのうちの1枚を思わせませす。そうしたらカードをそろえますが、クラブのKとその後ろのエクストラの間にブレイクを保ちませす。

前に向き直ります。「1枚のカードをポケットに入れます」と言って、ブレイクより手前の4枚を重ねて1枚のごとくポケットに入れます。

ここで客が思ったカードをたずねませす。クラブのKだったと仮定ませす。「クラブのKですか。ということは私はあなたの心を読むのに成功ませました。この中にクラブのKがないのをお見せませしょう」

と言って、手に持っている3枚を1枚ずつ表向きにテーブルに落としていきます。

そしてポケットから客が思ったカードを取り出します。ポケットの中のカードはマーク順になっていますから、迷わずに抜き出せるはずで。

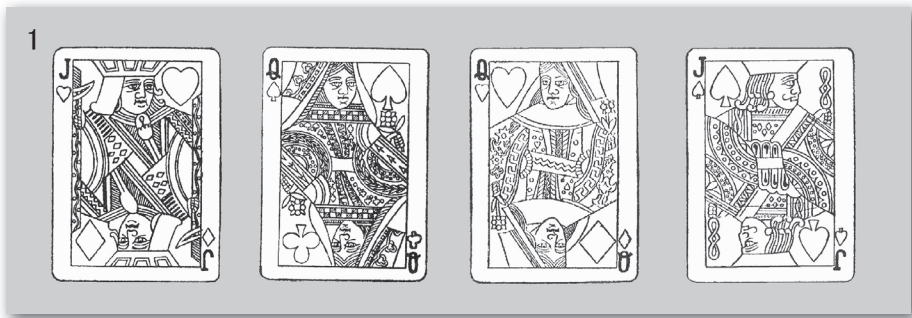
\* 備 考 \*

客にカードを見せて思わせるとき、1人の客を横に立たせておき、その客に対して背を向けてカードを見せれば、観客にはカードは見えません。

## プリンセスカードトリック 第2法

= ヘンリー・ハーディン、“Art of Magic”、1909年 =

このバージョンでは、5枚のカードを客に見せますが、そのうちの4枚は図1のような仕掛のカードです。



5枚目のカードはノーマルなスペードのKです。それら5枚をファンに広げたとき、クラブのJ、ハートのQ、スペードのQ、ダイヤのJ、スペードのKと見えるようにセットします。

ノーマルなクラブのJ、ハートのQ、スペードのQ、ダイヤのJをポケットに入れておきます。

\* 方 法 \*

前述のように5枚を広げて、バージョン1と同じやり方で、1人の客に5枚のうちの1枚を思わせ

ます。カードをそろえ、観客の方に向き直ります。思ったカードを当てるといって、スペードのKを抜いてポケットに入れます。もちろん表を見せてはいけません。4枚の方向をひっくり返してからファンに広げながら、客の思ったカードをたずねます。そのカードがファンの中にあることを見せます。そしてそのカードをポケットから取り出して見せます。

## プリンセスカードトリック 第3法

= ヘンリー・ハーディン、“アートオブマジック”、1909年 =

これはいちばん簡単なやり方ですが、ベストなやり方でもあります。どのカードを使っても演じられる点が優れています。

### \* 方法 \*

客にデッキをシャフルさせてから、好きなカードを4枚抜かせます。残りのデッキを受け取ります。4枚の中から客に1枚を思わせます。そのとき、あなたは密かにトップの3枚をパームして、デッキはテーブルに置きます。

左手に客から4枚を受け取り、それらをそろえるときにパームしている3枚をトップに加えます。それから表を自分に向けて、フェースに4枚見えるように広げ、その4枚を記憶します。そしてそれら4枚を見せ、「この中にどのカードを思ったか当てます」と言います。

そのあとフェース側の4枚を1枚のごとく取り、ポケットに入れます。残りのカードを裏向きで3枚あることを見せ、デッキの上に捨てます。客の思ったカードをたずね、それをポケットから取り出して見せます。

## プリンセスカードトリック

= ヘンリー・ハーディン、“Encyclopedia of Card Tricks”、1938年 =

ジーン・ヒューガードは、ヘンリー・ハーディンの‘プリンセスカードトリック’として書いていますが、“アートオブマジック”に解説された第3法の、ハンドリングが変更されたバージョンです。収録するほどの違いがあるわけではありませんが、‘バックスプレッド’が使用されているという点で、記録に残す価値があると思いました。

### \* 方法 \*

シャフルされたデッキを表向きに広げて、4人の客にそれぞれダイヤ、クラブ、ハート、スペードのカードを1枚ずつ取らせます。残りのカードを裏向きにそろえて、トップの3枚をパームし、デッキを右手に持ちます。

客からカードを集めますが、ダイヤ、クラブ、ハート、スペードの順で、裏向きに左手にのせてもらいます。デッキをテーブルに置き、左手のカードを右手でつかむとき、パームしている3枚を上に加えます。

ビドルポジションに持ったポケットのフェースを観客の方に向け、左手の指先でカードを広げ、(バック

クスプレッド)、4枚として広げます。エクストラの3枚は、最後のカードに重なっています。そのように広げられた状態で、1人の客にカードのフェースを向け、4枚のうちの任意の1枚を選び、おぼえてもらいます。

カードを開じて、裏を上にして、こんどはエクストラの3枚を広げて、「選ばれたカードを当てます」といって、適当な1枚を抜いて、「これかな」という表情を見せ、そのカードを違う位置に返し、別の1枚を抜いてまた戻し、最後にいちばん下の4枚を1枚として取り、ポケットに入れます。

残った3枚を数えながらデッキのトップにのせ、デッキをカットして中に運びます。相手のカードを名乗らせ、ポケットからそのカードを抜き出して、当たっていることを示します。カードはマーク順になっていますから、その中からしかるべきマークのカードを抜いて出すのです。

### ‘プリンセスカードトリック’の演出について

ヘンリー・ハーディンの原案を解説したところで、このトリックに対するプレゼンテーションについて書いておきたいと思います。‘プリンセスカードトリック’をプレゼンテーションなしで演ずるとしたら、つぎのようになるでしょう。

「この5枚のカードの中から、1枚のカードを心の中で選んでください。それでは1枚のカードをポケットに入れます。あなたのカードは何でしたか。はい、たしかに当たっています」と言って、マジシャンは相手の選んだカードをポケットから抜き出して見せます。

相手の選んだカードを当てるのなら、なぜそのカードをポケットに入れるのでしょうか。ポケットを使うのだとしたら、5枚のカードをポケットに入れ、1枚ずつ違うカードを抜き出して、しかも抜き出した時点で相手のカードでないことを見せるなら、ポケットを使う必然性が正当化されます。

このように必然性の弱いプロセスのあるマジックを、抵抗感なく見せるプレゼンテーションとして、これから説明する方法は、よい手本となるはずです。

「これからお見せするのは、‘プリンセスカードトリック’というマジックですが、1900年ごろに生まれたこのマジックが、どうして‘プリンセスカードトリック’と呼ばれたのか、その理由はどんな文献にも出ていません。私の豊かな想像力は、‘ゼルダの伝説’の光景を浮かべます。一人のプリンセスが誘拐されて、一人で城の部屋に閉じこめられているところです。そんなイメージを浮かべながらこのマジックをご覧ください」と話します。

「一人の男が、ある国のプリンセスを狂うほどに愛していました。あなたにこのカードの中から、心の中で1枚のカードを選んでいただいて、プリンセスの役を割り当てます」と言って、客にカードを思わせませす。



「男はある日、想いつのってプリンセスを誘拐しました」と言って、1枚のカードをポケットに入れます。「ところで誘拐されたプリンセスが誰であるかわかっていません。あなたの選んだのは何でしたか」と選ばれたカードを名乗させます。そして残りのカードの中にそれがないことを見せます。

「それではここでヒーローの登場です。プリンスはこの私です。幽閉されたプリンセスを助け出します」と言って、手をポケットに入れてごそごそと動かします。これは相手のカードを見つける動作をカモフラージュします。「あちらこちらの部屋を探しましたが、とうとうプリンセスを見つけました」と言って、相手のカードを抜き出して、「もういちど選んだカードをいってください」と復唱させてから、「たしかにプリンセスを助け出しました」と言って、カードの表を観客に見せます。

## ゴーストカード

= バーリング・ハル、単売、1907年 =

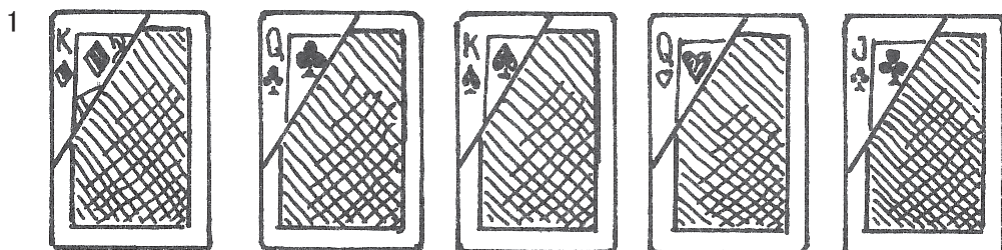
ハーディンの原作が発表されてまもなく、バーリング・ハルのギャフカードを使ったバージョンが売り出されました。マジックカフェでそのトリックの現象が説明されましたが、その説明を読んでやり方を推測しようとしたのですが、どうにもわからない部分がありました。

客が数枚の中から1枚思ったあと、カードを見せると、思ったカードが消えています。”そのあと裏と表をよく見せながら、1枚ずつ客の手に表向きに置いていく”と書かれていますが、裏と表を見せるとしたら、上下のインデックスが異なるダブルエンダーは使えないはずです。

幸いなことに、インターネットで色々調べるうちに、“Ellis Stanyon’s Best Card Tricks”の中に、カール・ファルブズが’ゴーストカード’のやり方を書いていることがわかりました。それを読んでみて、たしかに裏表をよく見せて置いたように見える方法でした。こんなギャフがあったのかと感心いたしました。客の手の上に置くときは、表向きにおくのですから、思ったカードが消えたことは明確に伝わります。以下の文章は、ファルブズの文章の翻訳です。

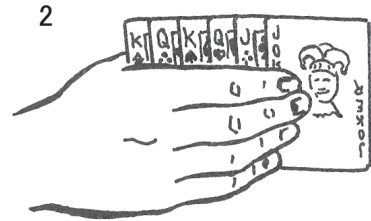
\* 準備 \*

図1のようなギャフカードを作ります。いちばん左端は、ノーマルなハートのKの裏面に、ダイヤのKを図のように切ったものを糊づけします。他のカードも図1に示した通りに作ります。ノーマルなジョーカー1枚も使います。



\* 方 法 \*

6枚のカードを図2のように持って客に見せます。その中から客に1枚のカードを思わせますが、「この中の好きなカードを心の中で選んでいただきますが、ジョーカーは魔法を起こすカードですから、ジョーカー以外にしてください」と言います。

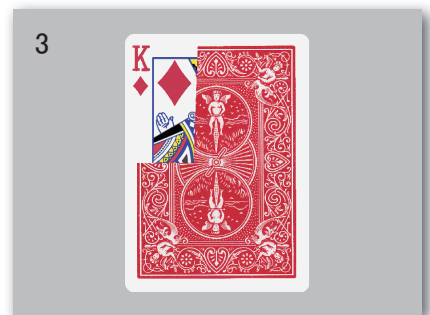


カードをそろえて週刊誌の下に入れますが、あとでギャフカードの裏面を観客に向けて取り出すとき、ギャフの表面が印刷されている部分を右手で隠せるような向きで置きます。

ジョーカーを取り出して、それで帽子の中のカードに対して魔法をかけます。客に手を伸ばして出させ、その上にジョーカーを表向きに置きます。つぎにハートのKをギャフ部分をカバーして、裏面を観客に向けて取り出し、手を前に倒してハートのKを見せ、表向きに客の手の上ののせます。それと同じようにあと4枚のカードを取り出して、表向きにして客の手の上ののせていきます。

取り出した5枚の中に客が思ったカードがあったかどうかたずねます。客は否定します。「なぜないかという、消えてしまったからです」と言います。「もちろんこの下にカードはありません」と言いながら、週刊誌を持ち上げてひっくり返し、何もなかったことを見せます。そのあとポケットから客の思ったカードを現します。

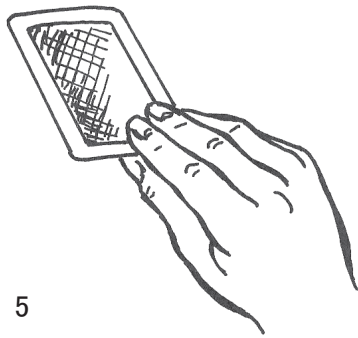
以上がファルブズの解説ですが、図1よりも図3のように作った方が、広げて見せたときにと、1枚ずつ裏面を見せるときにやりやすいと思います。



広げるときは、ジョーカーの表面を観客の方に向けて持ち、観客から見て、図4のように見えるように広げます。ファルブズの図2のような見せ方は不自然です。



帽子から1枚取り出して裏面を観客に見せるとき、ファルブズは次ページの図5のように持つと書いていますが、この図の通りに持ったのでは、ギャフ部分を隠すことはできません。おそらくは図を描くときの不注意だと思います。



5



左手で図 6( 観客から見た図 ) のような持ち方で取り出して、右手でつかんで向こうに返して表を観客に見せるようにします。

## ファイヴソウツイフェクト

= セオダー・アンネマン、"Shhh--! It's a Secret", 1934 年 =

見せたカードをすべて他のカードに取り替えてしまうという、たいへんユニークな作品です。

### \* 準備 \*

何でもよい 4 枚のカードを、背後のベルトにはさんでおきます。

### \* 方法 \*

デッキを客に渡してシャフルさせます。そのあとトップから 5 枚のカードをテーブルに置かせ、残りのカードをわきに置かせます。

5 枚を取り、ファンに広げて表を客に向けて、5 枚のうちの 1 枚を思わせます。そのとき、自分も 5 枚の表を見て、それらの数の順を記憶します。同じマークがあれば、どちらが上にあるかを記憶します。

5 枚を背後に運び、あなたの超魔力を使って 1 枚のカードを抜き出すと告げます。いかにもカードを探る仕草のあと、5 枚をそろえていかにも 1 枚のごとく前に出し、「このカードに違いありません」と言いながら、それを右ポケットに入れますが、そのとき左手はベルトの下から 4 枚を密かに取ります。そしてそれらを持った左手を前に出します。

「残りのカードは 1 枚、2 枚、3 枚、4 枚です」と言いながら、左手のカードを 1 枚ずつデッキの上ののせていきます。

「あなたは 1 枚のカードを心の中で選びました。思ったままでは他のお客様にわかりません。何

のカードを思ったか皆さんに教えてください」と言いますが、このセリフを言いながら、右手を右ポケットに入れ、3枚目まで数えて3枚目を少し引き出しておきます。

客がカードを告げたら、そのカードをポケットから抜き出します。3枚目をずらしてあるので、目的のカードをすぐ抜き出すことができます。

「さて、私の超魔力はうまく働いたでしょうか。はい〇〇の××です」と言って、カードの表を観客の方に向けます。「うまくいきました」と言って終わります。

## プリンセストリック

= レオ・ホロヴィッツ、Greater Magic、1938年 =

### \* 現象 \*

客に3枚のカードを見せて、そのうちの1枚を心の中で選ばせます。そして3枚を帽子の中に入れます。それから1枚を取り出して、ポケットに入れます。帽子の中に残っている2枚が見せられると、それらは選んだカードではありません。選ばれたカードはポケットから出てきます。何回か繰り返したあと、カードを調べさせることができます。

### \* 準備 \*

デッキ1組と、ハートの7とクラブのAのダブルフェース、ハートの10とクラブのAのダブルフェース、そして帽子を使います。

デッキのボトムからノーマルのクラブのA、ダブルフェースのハートの7の面を下に向けたもの、つぎにダブルフェースのハートの10を下に向けたものをセットします。ズボンにはノーマルなハートの7とハートの10を入れておきます。

### \* 方法 \*

超魔力について話をします。帽子をテーブルのあなたに近い位置に、口を上に向けて置きます。デッキをシャフルしますが、セットしたカードを動かさないようにやります。

デッキを表向きにして、「数枚のカードを使います」と言って、ボトムから3枚取り、デッキはわきに置きます。

3枚を1枚1枚名前を読み上げながら、表向きにテーブルに落としていきます。クラブのA、ハートの7、ハートの10の順に落とします。客に3枚のうちの1枚を心の中で選んでもらいます。そうしたら3枚をそろえ取り上げます。クラブのAをいちばん下にします。

3枚を額につけて考える演技をします。クラブのAの裏面が観客に見えます。「精神集中すると、はっきりと見えてきます。いずれにしても3枚の中からあなたが思っているカードを当てることに挑戦します」と言って、3枚を帽子の中に入れます。そしておもむろにクラブのAを取り、裏を観客に向けて取り出し、右ポケットに入れます。

少し考える間をとってから、「違いますね、取り替えさせていただきます」と言って、ポケットからクラブのAを取り、帽子の中に入れます。「もっと強くカードを念じてください」と言います。それからまた帽子から同じクラブのAを取り、ポケットに入れます。この演技により、2枚のカードの裏面を見せた感じが与えられます。

「ここまであなたのカードをたずねてはいません。あなたの思ったのは何のカードですか」と問いかけます。客がクラブのAと答えたとして、帽子の中に手を入れて、ハートの10の面を上に向けて取り出し、その面を上にしてテーブルに置きます。「思ったのはハートの10ではなく、そしてハートの7でもなく」と言って、そのときハートの7の面を上にして取り出し、その面を上にしてテーブルに置きます。「あなたの思ったのはこのカード」と言いながら手をポケットに入れ、「クラブのAですね」と言いながら、クラブのAを取り出して、ゆっくり表を客に向けて見せます。

客が思ったのがハートの7の場合には、帽子の中に手を入れて、ハートの7をひっくり返してクラブのAの面を上に向けて取り出し、その面を上に向けてテーブルに置きます。つぎにハートの10の面を上に向けて取り出し、その面を上に向けてテーブルに置きます。そしてポケットの中の順番がわかっていますから、ハートの7を取り出して見せます。

ハートの10の場合もハートの7と同じように行います。

以上のやり方をあと何回か繰り返しますが、そのつど3枚をそろえるときに裏面のあるカードをいちばん下にしてそろえます。そしてさり気なくその裏面を見せながら、3枚を帽子の中に入れます。

最後に行くときは、いままでと違うやり方をします。帽子の中から取り出すとき、裏面のあるのを外側にして、3枚を重ねて1枚のごとく取り出してポケットに入れます。

「これじゃないようですので、取り替えます」と言って、ポケットの中でノーマルカード3枚をそろえて、1枚のごとく取り出し、それらを帽子の中に入れます。全部表を上にしておきます。

「最後ですからやり方を変えましょう。あなたが思わなかったカード2枚を取り除きます」と言って、帽子の中から1枚出しますが、その表を確認してから出します。それをデッキの中央に入れますが、その上にブレークを作ります。「これは思わなかったカードです」と言いながら、ブレークからカットします。

もう1枚のカードを取り出して、「これも違います」と言って、そのカードをデッキの中央に入れて、

その上にブレイクを作ります。

「さてあなたが思ったカードは何ですか」とたずねます。それが帽子に残っていればそれを取り出し、トップにあるカードであったら、帽子から取り出したカードをトップに置き、ダブルターンオーバーして見せます。デッキ中央にある場合は、さり気なくブレイクからカットして、帽子から取り出したカードをトップに置き、ダブルターンオーバーして見せます。

ダブルフェースは両方ともポケットの中にありますから、ノーマルデッキでの演技に続けられます。

## 思ったカードのリビレーション

= ニック・トロスト、"New Tops" 1970年11月 =

### \* 現象 \*

11枚のカードを広げ、心の中でそのうちの1枚をおぼえてもらいます。マジシャンは11枚のカードの中から1枚のカードを裏向きにします。相手のカードを名乗らせてから、表向きの10枚を見せると、その中に相手のカードはありません。裏向きにしておいたカードを表向きにすると、相手のおぼえたカードです。

### \* 準備 \*

つぎのカードを順に重ねます。8C、KH/8S、3H/2S、10S/JH、2D/9C、7C/4D、9D/2C、5D/6C、QS/H9、4C/7D、AS。8C、ASの2枚はノーマルカードで、その他は示されたカードが表と反対側にあるダブルフェースカードです。この順はカードを広げたとき、いわゆる'エイトキングス'のセットとなっています。

### \* 方法 \*

裏が上に向くようにポケットを持って取り出し、「この中から好きなカードを1枚おぼえてください」と言って、表を相手に向けて11枚を広げます。フェースにあるスペードのAは「目立ちすぎのカードですから」とか何とか言って、それ以外のカードをおぼえさせます。なるべくこれは早く行い、すぐにカードを閉じるようにします。

ポケットを背後に運んでひっくり返し、すぐにボトムにあるSAを抜いて、表向きにしてトップにのせ、その下のC8を抜いて前に出し、裏向きのままテーブルに置き、「これがあなたのおぼえたカードだと思います」と言います。

カードを前に出します。表面にスペードのAが見えています。その下には相手が見たのとは異なる10枚のカードの表面が上を向いています。10枚を裏向きのカードの上に重ねて、全体を取り

上げ、「表向きのカードの中にあなたのカードがあるかどうか見てみましょう。あなたのカードは何でしたか」とたずねます。

カードをビドルポジションに持ち、左手で上から1枚ずつ取っていきますが、心の中で‘エイトキングス’のコードを追っていき、相手のカードに該当したとき、そのカードを右手のカードの下にスチールします。そのようにして表向きのカードをすべて左手に取ると、それらの中に相手のカードはありません。いま、裏向きのカードの下に相手のカードが隠れています。2枚を1枚のごとく返して、相手のカードであるのを見せます。

#### \* 備 考 \*

‘エイトキングス’のセットというのは日本ではおなじみではありません。日本では‘極道親父’というのが有名ですので、それをご存知の方はそのセットを適用してください。たんに表面と裏面のカードの数の合計が13であるような関係にしておけば、相手のカードの数を13から引いたカードのときにスチールすればよいことになります。

### ポケットプリンセス

= ロイ・ウォルトン、“コンプリートウォルトン Vol.2”、1988年 =

この作品は、5枚のカードを使ってプリンセストリックと同じように、客が思ったカードを当てたあと、残りのカードが4枚のAに変化してしまうというものです。何となく、ウォルトンの‘オイル&クイーン’的な雰囲気を感じる作品です。

#### \* 準 備 \*

4枚のAを上着の右ポケットに入れ、スムーズにパームできる状態にしておきます。表は体の方に向けます。

#### \* 方 法 \*

デッキをファンに広げ、相手に5枚のカードを抜かせます。残りのカードはわきに置きます。5枚の表を見て、1枚のカードを心の中で選んでもらいます。

5枚を受け取って、表を上にして広げ「この中から1枚のカードを心の中で選んでもらいました」と言いながら、5枚のうちのトップ側の2枚のカードを記憶します。5枚のカードを混ぜますが、トップの2枚がもとの位置に戻るような混ぜ方をします。

相手が選んだカードを当てると言って、トップの2枚以外のカードから1枚抜いて、そのカードの表をグリップスし、ポケットに入れてそれをポケットの中に置き、4枚のAをパームします。右手を

左手のカードの上にかけてパームしているカードを上置きしますが、すぐにその4枚を取り上げて、ボトム側にまわします。この動作は、いかにもカードをカットしたように見せるものです。Aの上にブレイクを作ります。

カットしたあとも右手はカードから離さず、ブレイク上の4枚をパームして、残りの4枚をファンに広げます。右手はファンする動作の中でパームしているのをカモフラージュします。広げたら「あなたの選んだカードは何でしたか」とたずねます。相手のカードが先ほどあなたが入れたカードであれば、相手にポケットからカードを出させて、当たっていることを示します。そして手に持っている4枚のAを見せ「なぜ、Aを選ばなかったのでしょうか」と言います。

相手がパームしているうちの手の平に近い2枚のどちらかを言った場合は、ポケットに手を入れて、他のカードをポケットに残し、そのカードを出して当たったのを見せます。もしも相手の言ったのが知らないカードであれば、パームしているカードのフェースをグリンプスし、それであればそれ、それであればフェースから2番目のカードをポケットから出します。そして同じセリフを言って、4枚のAを見せます。

#### \* 備 考 \*

私はこのトリックを当誌に含めるかどうか迷いました。4枚のAを見せることは、当てる現象のヒントを与えてしまうのではないかと感じたのです。プリンセストリックとしては駄作だと思います。

しかしながら、自分がこのトリックを演じるとしたら、どのような見せ方をするだろうかと考えたとき、面白く見せられることに気づいたのです。Aを見せる部分をつぎのように演じます。

相手のカードが当たったのを示したら、そこで終わった感じを出します。「ところで、なぜこの4枚があなたのカードと違うとわかったのでしょうか。それはこの4枚がまったく違うカードだからです。皆さんでも違いがわかりますよ、ほら」と言って、4枚のAを見せます。

そのようなセリフを言って演ずるかどうかが、トリックが成立するかどうかの差になることがあるのです。

このトリックは'プリンセスカードトリック'としてよりも、変化現象として演ずればよいのです。このあと4枚のAのマジックに続ければ、さらに起承転結は明確になります。マジックというのは、たんに不思議なことをやればよいのではなく、そのことによって面白さとかおかしさとか、トリック以上の不思議な雰囲気とかを感じさせるものであるべきだ、と私は信じています。

別の言い方をするなら、トリックによる不思議さは'知的'なものであり、知的な現象を利用して、'感情的'な効果を観客の心の中に起こすのが、エンタテイナーだと考えるのです。



## プリンセス・イン・ザ・ケース

= 加藤英夫、1999年6月15日 =

‘プリンセスカードトリック’の類似現象ということで収録いたしました。

### \* 準備 \*

カードケースに図1のような穴をあけます。‘Xレイデック’と同じ仕掛です。



### \* 方法 \*

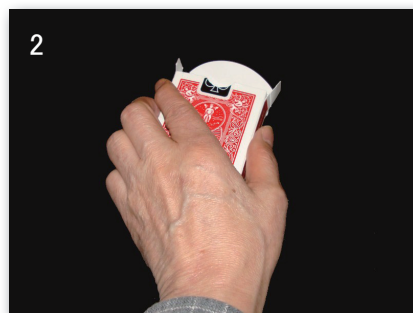
以下のハンドリング中、つねにケースの穴を見せないような扱い方をしてください。

相手にカードを選ばせませんが、わかっているカードをフォースするか、何らかの方法で相手のカードが何であるかを認知します。コンビンシングコントロールは、このマジックに最適の技法です。カードをスプレッドして1枚のカードをタッチさせ、そのカードをからカードを分けて、右手を上げてそのカードのフェースを見せ、右手を降ろすときにコンビンシングコントロールですり替えたカードをアップジョグし、相手の記憶したカードはボトムに運びます。

アップジョグされたカードを指さして、「このカードが話の主演です」と言います。そのカードを抜き取ってテーブルに置き、「あと数枚のカードを使います」と言って、表を自分に向けて広げ、7、8枚のカードを抜いてテーブルに裏向きに出しますが、その中にボトムカードを含めます。当然、相手のカードが何であるかわかります。

抜き出したカードを先に置いた、相手の選んだと思われているカードを重ね、相手にシャフルさせます。残りのカードは使わないので、わきに捨てます。

図2のようにケースをさし出し、ケースの中にシャフルされたカードを裏向きに入れさせます。そのときあなたは視線を横に向けています。



ケースを垂直に持ち、「これからあなたのカードを当てますが、1枚ずつカードを除外していき、最後にあなたのカードを残します」と言って、図3のようにケースから1枚のカードを抜き出しますが、そのとき穴からカードをグリップして、見えているカードが相手のカードでなければ、いちばん手前のそのカードを抜き出します。



そのように1枚ずつ抜き出していきますが、穴から相手のカードが見えたら、それ以降はケースの中からいちばん向こう側にあるカードを抜き出していきます。

相手のカードを名乗らせてから、最後のカードをケースから出し、表向きにして見せます。

## 5人のプリンセスカード

= ジョナサン・タウンゼント、“Magic Cafe”、2004年2月21日 =

マジックカフェの‘プリンセスカードトリック’についてのスレッドで、現象だけ投稿されたものですが、私は考案者にやり方を確認し、掲載許可をもらいました。

### \* 現象 \*

デッキのトップから5枚のカードを取り、テーブルに置きます。あと4組そのように5枚のポケットをテーブルに置きます。5枚のポケットが5組作られました。1組目のポケットを取り、1人目の客に表を向けてその5枚のカードを広げて見せ、その中の1枚を心の中で選ばせます。マジシャンは表を自分に向けて広げ、中から1枚抜いて、裏向きにテーブル中央に置きます。残りのカードは1人目の客の前に置きます。

2組目のポケットを取り上げ、2人目の客に対して同じことを行います。さらにあと3人の客に同じことを行います。その結果、テーブル中央に5枚のカードが抜き出され、それぞれの客の前に4枚のカードが置かれています。

「これから1人1人に残りの4枚を見せますので、その中に思ったカードがなかったら、手を上げて“ない”と言ってください」と説明して、1人目の客の前にある4枚を取り、表をその客に向けて広げます。その客は手を上げて“ない”と言います。あと4人の客に対しても同じことをやります。全員“ない”と言います。

「さて私がそれぞれのカードから抜き出したカードを表向きにします。その中に皆さんが思ったカードがあったら、すぐ手を上げて“ある”と言ってください」と説明します。そして5枚を取って、表向きに5枚表が見えるように広げて置きます。するとすべての客が手を上げて“ある”と言います。

\* 準備 \*

5 人に見せるそれぞれの 5 枚は、最初に広げたときに、すべて同じ 5 枚に見えるような組み合わせですが、フェースに置くものだけノーマルカードで、他の 4 枚はすべてダブルインデックスです。ですから最初に 5 枚見せて、その中からノーマルカードをどけて、最初とは反対のインデックスを広げれば、客の思ったカードは消えています。

しかもそれぞれの組のフェースに置くノーマルカードはすべての組で違うものとします。それら 5 枚を広げたときに、どの組でも同じ 5 枚となるように作るのです。

そのように作った 5 組を重ねてデッキのトップ側に配します。

\* 方法 \*

下半分のセットされていない部分を利用して、トップの 25 枚を保つフォールスシャフルを行います。

「5 人の方に 5 枚のカードをお見せしますので、まず 5 枚ずつの組を 5 組作ります」と言って、トップより 5 枚ずつ、5 組テーブルに置きます。ノーマルカードがフェースカードになるように置きます。

1 組目のポケットを取って広げ、表を 1 人に見せて 1 枚を思わせたあと、表を自分に向けて、カードを探す演技でカードの位置を変えたあと、ノーマルカードを抜いてテーブルに置きます。それを全員に行います。その結果、テーブル中央には、5 枚のノーマルカードが置かれて、5 人の客の思ったカードは必ずそこにあります。

残りの 4 枚をそれぞれの客に見せるときには、フェースにあるダブルインデックスの偽のインデックス部分を隠し、最初とは違うインデックスの方を広げて見せます。

「これから 1 人 1 人に残りの 4 枚を見せますので、その中に思ったカードがなかったら、手を上げて“ない”とってください」と説明して、1 人目の客の前にある 4 枚を取り、表をその客に向けて広げます。その客は手を上げて“ない”と言います。あと 4 人の客に対しても同じことをやります。全員“ない”と言います。

「さて私がそれぞれのカードから抜き出したカードを表向きにします。その中に皆さんが思ったカードがあったら、すぐ手を上げて“ある”とってください」と説明します。そして 5 枚を取って、表向きに 5 枚表が見えるように広げて置きます。するとすべての客が手を上げて“ある”と言います。

## 心の中のプリンセス

= 加藤英夫、2012年7月16日 =

これはニック・トロストの '思ったカードのリビレーション' の一部を変更したバージョンです。原作の備考に書こうかと思いましたが、説明が長くなりますし、変更した点の意図を明確にお伝えするために、ここに書くことにいたしました。

原作において私が好まないことは、"フェースにあるスペードのAは「目立ちすぎのカードですから」とか何とか言って、それ以外のカードをおぼえさせます" という部分です。トロストがスペードのAを強調したことの狙いは、背後でカードを操作したあと、前に出したときに表面のカードが変わっていないことを印象づけるために違いありません。

私はその部分が弱まったとしても、そのようなセリフを言ってマジックを演じたくありません。

そしてさらに決定的に弱いと思う点があります。それはトロストは、客が思ったカードをたずねてから、ビドルポジションからカードを見せていきます。思ったカードをたずねるまえにカードを広げて、そこに思ったカードがないことが見せられるのに、そうしていないのです。そうすることこそ、'プリンセスカードトリック' の魅力なのですから、そうしない手はありません。

さらに、最後に裏向きのカードを表向きにするとき、"2枚を1枚のごとく返して、相手のカードであるのを見せます" と書かれていますが、この部分はクライマックスですから、怪しい返し方をしたとしたら、もとも子もありません。ビドルカウントの最後に残った2枚を返すとしたら、いったいトロストはどのようにやったのでしょうか。その部分をドラマチックにするために、いくつかのやり方を提案いたします。

### \* 準備 \*

6枚のダブルフェースを使います。6枚の一方の面を上にして広げた見かけと、反対面を上にして広げたときの見かけが、なるべく似たような感じになるような組み合わせにします。

ここでは、最初に見せる一方の面がハートの4、クラブの5、ダイヤの6、クラブの7、ハートの8、スペードの9で、それぞれの反対面は、数は1小さく、マークは同じ色で反対のマークのものとします。ハートの4の反対面はダイヤの3、クラブの7の反対面はスペードの6、スペードの9の反対面はクラブの8ということになります。

このように組み合わせにしておけば、エイトキングのようなスタック順にセットしておかず、カードを混ぜても表面を見れば反対面がわかるという利点があります。

それら6枚がよく混ざっている状態にして、上にノーマルなダイヤのQを裏を上にしてのせます。

\* 方 法 \*

ダイヤのQの裏面を上に向けてパケットを取り出します。「ここに7枚のカードがあります」と言って、パケットを表向きにして、上から1枚ずつテーブルに置いていきますが、カードを思わせる客に対してインデックスが正面に向くように、右から左に向かって並べます。

「この中からどれでも1枚のカードを心の中で決めて、強く念じてください」と言って、客にそうさせます。カードをそろえて取り上げます。

「あなたがいま心の中で思っているカードが、あなたが愛する人だとします。そのカードを当てます」と言って、カードを背後に運び、パケットをひっくり返し、いちばん下にあるダイヤのQを右手で持って前に出し、テーブルに置きます。

左手のカードを前に出し、右手で前エンドをつかみ、ファンに広げて客に見せ、「残りのカードの中にあなたが思ったカードがありますか」とたずねます。相手は否定します。

「あなたが思っているカードを他のお客様は知りません。ですからそのカードが何であるか教えてください」と言って、思っているカードを言わせます。

「ではそのカードがあるどうか、皆さんに確認していただきます」と言って、パケットをテーブルの裏向きのカードの上に落とし、全体を取り上げてビドルグリップに持ちます。

そして左手で1枚ずつ引いて取っていき、思われたカードの反対側のカードを右手のカードの下にスチールします。1枚目に出たら2枚目を取るときにそれをスチールすることになりますし、6枚目に出た場合には、取ったあとそのカードの下にブレイクを作り、裏向きのカードをその上に置いてダブルで取ります。

「あなたが思ったのはハートの7でした。ほら当たっています」と言いながら、ダブルカードをひっくり返して当たっているのを見せます。

\* 備 考 \*

効果的なダブルカードの返し方を3通り書きます。

トロストの説明では、“右手に残っている2枚を返す”となっていますが、6枚を左手に取ったあと、右手のダブルカードを左手のカードの上に置きますが、ダブルカードの下に左親指つけ根のブレイクを保持します。「というわけで、あなたが心の中で思った、クラブの7を当てることができました」と言いながら、ブレイク上の2枚をサムペールプッシュオフして、右手でスタッド式に表向きに返します。「クラブの7を」と言ったときに表向きになるようにタイミ

ングを合わせます。

つぎのやり方は、“Card Magic Library”第1巻に解説されている、’テーブルダブルリフト3’を用いるやり方です。表向きのカード6枚を左手に引いて取ったら、残りの2枚を左手のカードの上に置き、2枚の下に右親指のブレイクを保ち、ポケットをテーブルに置きますが、ブレイク上の2枚をプッシュして前にずらします。そして「というわけで、あなたが心の中で思った、クラブの7を当てることができました」と言いながら、前エンドのずれを利用して、ダブルカードを手前に表向きに返し、下のカードの上に置きます。

最後のやり方は、ラフ&スムーズを利用します。すべてのカードの表面だけラフ加工しておきます。表向きのカードを6枚左手に引いて取ったら、続けて残りの2枚を左手のカードの上に置き、ポケットをテーブルに置きます。そして同じセリフを言って、ダブルカードを手前に表向きにひっくり返し、下のカードの上に置きます。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 11 号

発 行 2013 年 3 月 3 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

